

素案

平成 30・31 年 期 神 奈 川 県 青 少 年 問 題 協 議 会

「情報ネットワーク社会における青少年育成・支援」

～子ども・若者のコミュニケーションと育ちを考える～

令和 2 年 3 月

神奈川県青少年問題協議会

目次

平成 30・31 年期神奈川県青少年問題協議会報告の概要

第 1 章 審議テーマ等

- 1 審議テーマの設定について
- 2 協議の経過と本報告書の構成

第 2 章 情報ネットワーク社会の中の青少年

- 1 青少年のコミュニケーションの現状
- 2 困難を有する青少年の現状
- 3 情報ネットワーク社会への対応の状況

第 3 章 青少年育成・支援を考えるポイント

- 1 青少年のコミュニケーションの現状
- 2 困難を有する青少年の現状
- 3 情報ネットワーク社会への対応の状況

第 4 章 議論の方向性

- 1 情報ネットワーク社会における若者の信頼関係と成長
- 2 曖昧なコミュニケーションと人間関係
- 3 親子のコミュニケーション

第 5 章 実践検証事業～青少年のコミュニケーションに関する意識調査

- 1 実施概要
- 2 実施結果
- 3 検証結果

第 6 章 今後に向けて（提言）

第1章 審議テーマ等

1 審議テーマの設定について

(1) 今期審議テーマ

「情報ネットワーク社会における青少年育成・支援」
～子ども・若者のコミュニケーションと育ちを考える～

平成30・31年度神奈川県青少年問題協議会は、情報ネットワーク社会における青少年のコミュニケーションについて、現状を捉え直し、青少年の育ちに必要な支援について調査審議を行うこととした。

(2) 協議の視点

検討にあたっては、次の3つの視点から協議を行う。

○ 青少年のコミュニケーションのあり方

「顔と顔の見える関係」や「SNSなどのネット上の関係」など様々なつながりがある中で、青少年のコミュニケーションの現状を捉え直し、今後の青少年の健全育成について検討する。

○ 困難を有する青少年への支援

不登校やひきこもりなどの青少年におけるコミュニケーションの課題や、青少年への支援のあり方について検討する。

○ 情報ネットワーク社会への対応

情報ネットワーク社会における青少年の健全育成や青少年への支援など、青少年の健やかな成長を支える大人や社会のあり方について検討する。

2 協議の経過と本報告書の構成

- 本協議会企画調整部会は、平成30年度に全部会委員が、各自の専門的見地や取組み実績を踏まえた意見発表を行った。その発表内容及び意見交換の概要を「中間とりまとめ」としてまとめた。
- また、令和元年7～8月に実践検証事業として、部会委員が関係する青少年を対象にインタビューを行い、「中間とりまとめ」でまとめられた議論の方向性に対する青少年の意識や実態を把握し、協議内容の検証を行った。
- これらの経過を踏まえて、本報告書は、以下の構成となっている。

※構成の表記は、今後整理します

第2章 情報ネットワーク社会の中の青少年

1 青少年のコミュニケーションの現状

(1) 日常のコミュニケーションを支える SNS

- SNS は、以前は自分の身の回りにはいない、自分にとって必要な人と出会うためのツールであったが、現在は、すでに知っている人との関係を維持するための道具になってきている。バーチャルなコミュニケーションはリアルと別にあるのではなく、人間関係全体を維持するためのインフラとなっている。LINE などがあることを前提に、人間関係や組織、学校、地域を考えなくてはならない。
- LINE は、知り合い同士がリアルタイムでやり取りできるなど、会話のような手軽さがあり、若者は当たり前に使っている。
- 若者にとって、SNS の「いいね」や「リツイート」の数は、その人の価値を表す指標になっているのではないか。
- パソコンやスマートフォンは、新聞やテレビなど従来のメディアが持つ主義主張や意見を伝えるメッセージ伝達機能と、感覚や感性を伝える感覚刺激機能をあわせ持つ。また、従来のメディアの中では、情報の受信者であった人が、情報の発信者になることができるという特徴がある。情報ネットワーク社会では、「情報を解釈・理解する力」、「情報を編集・創出・発信する力」が求められるのではないか。
- SNS によるコミュニケーションコンテンツは、バーチャルの世界で楽しさや、面白さを自分なりに取り出し、加工・編集して作ることができる。また、メッセージと感情、感性が一体化あるいはクロスオーバーしている。関連して、公共的なこととプライベートなこととの境目がなくなり、情報発信に関して大きな問題を引き起こすことになっている。

(2) 言語能力とコミュニケーション

- 学校教育では、子どもの言語能力について、表現力だけではなく、論理的思考力を含むものとして、自分自身の言葉を適切に用いて感情を表現する力を伸ばしていくことになっている。ただし、学校教育だけでは、教育目的に沿わない日常生活に関する言語能力を十分に育てていくことはできない。
- 子どもたちの言語の応用力が落ち、読解力が下がっていると言われている。そのため、これまで言語で構成されてきた自我を作れなくなっているのではないか。
- 子どもたちが乳幼児期からの親子関係の中で辛い、悲しい、寂しかった、という感情を言葉で受けとめてもらえた体験が不足し、自分の気持ちを言葉にして語っていいと思えなくなっているのではないか。

(3) 子どもの自己形成

- 子どもの自己形成を考えた場合に、「今をすごく充実させていきたい」、「10年、20年先の長期的な自己イメージが持てない」、「自分自身のリスクとして一つに絞りたくない」という自己形成のあり方は、定住しない姿の模索である。

これまで教育は、しっかりした世界の中で子どもを支えて育て、社会に解き放そうという考え方であった。新しい課題は、子どもが、定まった世界に支えられることなく成長し、その後どのように生きていくのかということである。何らかの能力が未熟であっても、社会空間に関わり、生きる世界を構成する者として子どもを捉えることで、「非定住の自己形成¹」という課題に応えるようなネット空間を構築できないか。

- 個人のやる気やニーズは、元来、個人に内在しているものではなく、関係性の中から発生するものであるため、関係性の中で自分の存在を感じ取っていることを捉え直す必要があるのではないか。埼玉県調査では、非認知能力、いわゆる肯定感や承認関係において、頑張ろうと思う気持ちそのものが学力向上につながり、単に子どもたちが知的なものを詰め込まれるだけでは、学力は向上せず、やる気が出ることと学力に相関関係があることがわかってきている。

(4) 地域の状況

- 地域の自治会や子ども会などが衰退しつつあり、祭りや日々の暮らしの中で、大人が生き生きとしている環境に子どもがいて、この町に暮らしていてよかったと思える文化が途絶えてきているのではないか。
- 厚木市森の里地区では、「地域社会が地域の子どもを育てよう」、「地域ぐるみで、子どもの縁でつながる人のネットワークづくり」、「ともに学び、ともに育つ、成長するまちづくり」を活動の理念としている。子どもたちが実体験できる場の創出や、きっかけづくりを通して、多様な人との出会いから生まれるコミュニケーションによる、子ども同士の仲間づくり、大人同士の仲間づくり、人の繋がりが生まれている。

2 困難を有する青少年への支援

(1) 生きづらさを抱える青少年

- 青少年の問題は、大きく格差が広がり、二極化したと感じる。子どもたちは、「貧困やネグレクトからくるストレス」と、「過干渉によるストレス」をためている。
- 「自己責任」により、失敗は許されず100%でなければならないという思い込みから、失敗したら社会は助けてくれないので頼れる人を作っておかないと危険であ

¹ 「非定住の自己形成」：家庭、学校、地域という定まった場所での子どもの自己形成に対して、「SNSやインターネットの世界という定まらない場所（＝非定住）」で自己形成すること。（藤井部会長意見発表資料）

るという学生が多くいると感じている。

- 「やりたいこと」は、色々な体験をしないと出てこないはずなのに、子どもの頃から「やりたいこと」をなさいと言われ続け、「やりたいこと」がない自分は駄目な人間だと思ってしまい、「やりたいこと」を自分で決めて、目標を立ててやっ
ていかななくてはならないというプレッシャーがあるのではないか。
- 子どもたちは、「個性的であれ」と言われ続け、人と比べて個性的であると思っ
ても、実はその個性に序列があると思っている。しかし、序列には基準がなく、自
分が上に立つことも可能だが、相手を潰してまで頑張る上には思わない
のではないか。ある意味で、皆で下方に引きずり降ろし合って平準化しようとし、
目立とうとしないのではないか。
- 「認定 NPO 法人育て上げネット」による電話相談では、本人とつながることは少
ないが、LINE 相談では、短期間に多くの本人とつながることができた。LINE 相談
というバーチャルな対話の場では、相談者が何も言わずに途中で風呂やトイレに行
くので、相談が終了したのかと思うと、風呂やトイレに行っていましたということ
があった。こうしたことが、日常の友人関係でも生じていると考えられる。
- 子どもの SOS は、なかなか言葉でキャッチできない。親に心配をかけまいとし
て助けてと言えない、自分のプライドが邪魔するなど相談機関を利用しないことが
多い。「発見する相談」という、子どもたちの SOS をキャッチできる感度のいい
大人を地域の中でしっかりと研修するなどして増やしていく必要がある。

(2) 困難を有する青少年とコミュニケーション

- 「認定 NPO 法人育て上げネット」による「若年無業者白書」の分析では、困難を
有する若者は、相談できる友人が少なく、大半が家族に相談している状況がある。
また、同法人を利用する若者は自信がないことやコミュニケーションの苦手意識
を改善したいという思いがある。さらに、職場で仕事上のわからないことを相談で
きない若者も多く、人との対面によるコミュニケーションが苦手なことで悩んでい
る。

(3) 安心して失敗できる場の不足

- 失敗する体験が不足している。親たちが失敗や怪我をさせまいとすることによ
り、子ども・若者は極度に失敗を恐れている。安心して失敗できる環境を地域の中
で用意することや、できないということを受け入れていくことが大事である。
- 学校以外の育ちをどう位置付けるか。不登校は悪くない、問題行動ではないとい
うことを地域に広げていく必要がある。
- 高校生年齢以降のひきこもりへの支援が不足しているのではないか。ひきこも
り・不登校支援として、地域の中に目的なしに集えるような場が必要である。

(4) 青少年が社会に出る準備の難しさ

- 「VUCA」の時代²といわれるように、不確実性、複雑性が高い時代となり、正解がなく、前例や経験が通じにくい社会になり、青少年が社会に出る準備が難しくなっているのではないか。大学入学や就職内定により先が見えるということはなく、就職しても離職するなど成長するには時間がかかるという印象がある。
- ミレニアルズ世代³が育ってきた環境は、格差が広がる中でも経済的な豊かさを背景としたサービスがあり、体罰や厳しい指導などが減り、個性が尊重される教育を受け、失敗する前に大人にサポートされるほか、試行錯誤する自由な遊びの経験などが少ないといった状況にある。こうした中、若者は、個性を尊重してくれる大人を信頼するが、個性を脅かされそうになると殻を閉じるという傾向があるのではないか。

3 情報ネットワーク社会への対応

(1) SNS 普及における弊害

- いつでもどこでもあらゆる情報にアクセス・コンタクトできる便利な社会になったが、生身の人間の情報処理能力がオーバーフローして心身に負担がかかっているのではないか。こうした中で、子どもたちに SNS 疲れやネットいじめといった問題も生じている。
- 若者の中では、LINE の返信を 5 分以内にするといったルールなどが何となく作られ、それに囚われて、息苦しくなる。フィルターバブル⁴や、自分に興味があるネットワークの中だけで発言し、自分の発言が素晴らしいものだと勘違いするなど、技術そのものというより、予測していなかったリスクが発生している。

(2) 情報技術の活用

- デジタルネイティブといわれる若者世代は、SNS やクラウドファンディングサイト、ブログなどあらゆるツールを使い、自分でプロジェクトを構想して実現しようと思ったことを形にすることに長けている。
- 四国のある町では、「メーカーズスペース」という 3D プリンターやレーザーカッターなどを使える場所で、地域の高校生が町からイベント商品の作成を請け負う活動をしている。また、地域の方が小学生に 3D プリンターを使用してフリスビー

² 「VUCA」の時代：「Volatility（変動性、不安定さ）」、「Uncertainty（不確実性、不確定さ）」、「Complexity（複雑性）」、「Ambiguity（曖昧性・不明確さ）」がより顕在化してくる時代（平成 30 年 3 月経済産業省中小企業庁「我が国産業における人材力強化に向けた研究会（人材力研究会）」報告書引用）

³ ミレニアルズ世代：1980 年前後～2000 年前後生まれの世代を指す。（田中委員意見発表資料引用（@DIME「若者の心をつかめぬ企業に未来はない」））

⁴ フィルターバブル：検索エンジン（人工知能）はユーザの嗜好を学習し、ユーザが喜ぶ結果を優先的に表示する。そのため、各ユーザの見たくない情報を遮断する（フィルタ）ことで、自分の見たい情報のみの「泡」の中に閉じられてしまう。（坂倉副部長意見発表資料引用（イーライ・パリサー著「フィルターバブル—インターネットがかくしていること」））

を作って遊ぶという授業をしている。フリスビーは手軽で、体を使って遊ぶことができるし、自分でパソコンを使って作る体験ができる。

第3章 青少年育成・支援を考えるポイント

1 青少年のコミュニケーションのあり方

(1) 社会構造の変化と青少年育成・支援

- 現在も戦後の工業社会と同じように、大学の卒業一括採用から始まり、大学の偏差値の序列や、高校、中学校、小学校と下がるにつれて、よりよい大学に行かなくてはならないという思いが強いのではないか。例えば、50年前は言われた手順通りに物を作る人がたくさん必要だったかもしれないが、今はそうではない。今、5歳の子どもがどのような体験をすると、少なくとも20年後に、少しでもいい社会にできるのかという長い目で見た提案を議論したらいいのではないか。
- 約20年前から共働き世帯と専業主婦世帯が逆転し、女性が働いていることが当たり前になっている。働く親の世代が偏差値などを比較する社会の中で育ってきたため、感情の部分をあまり見ることがなく、常に自分の子どもと周りを比較して、子どもの知力だけに注目し、自分の思い通りにコントロールしようとする親が少なくない。そういった環境の中で、小さな頃からマイナスの感情を受けとめてもらえずに、子どもの感情が置き去りになり、20歳を過ぎても、それを言語化することが難しい状況にあると感じる。
- 近代工業社会の時代ではなくなったが、実はまだそちらを強化するような動きも一面であり、子どもが生きている世界と、制度がずれてしまっている。子どもたちは、そのはざままで苦しんでいるということがあるのではないか。そこに、バーチャルなものが入り込み、子どもたちがそちらに逃げていくということが起こるのではないか。もう少し身体の鍛え方や作り方のようなところや、親子の関係、社会と個人の関係のほか、個人の存在のあり方を個体として見るのか、もう少し関係の中において見るのかということについて、ここ20年、30年先を目安に議論してはどうか。
- 若者が言葉を出せなくなっているのは、社会参加のあり方や子ども・若者が参加する仕組みができていない社会だということではないか。そのため、若者は大人に従わなくてはならない、自分の意見がどうせ通らないという社会構造自体がつまらなくなっているのではないか。若者が提案したことが形となって受け止められ、承認されていく社会をどう作るのか。社会を構成するパートナーとして子ども・若者と大人が対等なパートナーだということや、子どもの力を信じてまちづくりをしていくことが必要ではないか。

(2) これからの子どもの「育成」

- かつて、子どもは将来働き手になるということで、育成の対象、教育の対象となり、ある意味で将来の大人として価値化されてきた。一方で今は、子どもであることそのものが価値化され、何の基準で価値化されているかという基準がないのではないか。

- 成長や発達をしない社会に私たちは生きている。過去の成長や発達という意味で、例えば、労働者として働ける力を身につけていくことや、会社で働けるようになる力をつけていくというような基準がはっきりしていた。会社で働いている時間は、自分の働きで評価されるが、それ以外のプライベートな時間は評価の対象ではなかったはずだが、今は、すべて日常生活から何から何まで全て評価の対象になってしまう。発達や成長をしていなくても評価されることになるのではないか。
- 環境を与えられてその中で生きていこうとする、ある一定の方向に持って行かれるような、依存させられることを主体的と思わされるような形の存在ではなく、自分たちで価値を創り出し、環境を利用しながら、お互いに新しい関係性を作っていくという形に変えていかなければいけないのではないか。

(3) 地域社会の中での青少年育成・支援

- 地域での子どもの育成では、ひきこもりなどの問題が生じる前に、予防型の支援を行っていくべきではないか。地域社会が地域の子どもの育て、ともに学んで、ともに育つということが大切ではないか。自治会やPTAは古いと言われているが、厚木市森の里地区では子どもの関係で、そういった組織が緩やかに繋がっている。
- 子どもが育つ環境づくりは、家庭だけではできない。また、学校だけ、地域社会だけでもできない。地域総ぐるみで、皆が共通認識を持って環境づくりをしていく必要があるのではないか。青少年育成や子どもが育つ環境づくりは、まちづくりそのものであると考えて、自分たちの手で作っていき、それを少し行政が支えると成功するのではないか。普段から地域の大人が、子どもを見守ることを心におくことが大切ではないか。
- 今、子ども食堂が広がってきているように、一緒にご飯を食べるなど多世代でまじりあえるような、地域の第三の大人と交流できる社会が広がるとよいのではないか。

(4) 新たなコミュニケーションの可能性

- バーチャルでなければできないような、クリエイティブなものや皆が参加できないものをリアルとクロスオーバーすることで、リアルとバーチャルそれぞれの欠点を補うことができ、より面白いコミュニケーションができるのではないか。
- 青少年のコミュニケーションの一つとして、コスプレのように素のままの自分を出さないで、ちょっと違うものになって、別の自分を表現できるような場や取組みが地域の中にあってもいいのではないか。

2 困難を有する青少年への支援

(1) 安心できる人間関係の構築

- 困難を有する若者の中には、暮らしのモデルを持たない若者たちが多くいる。経済的に貧しいだけではなく、家族以外の人と出会う機会が少ないことによる関係性

の貧困、コミュニケーション能力の低さがある。受容され、安心して話せる人間関係を育むことが大切である。

- ひきこもり生活をする中で手に入らなかった社会生活を取り戻す。受容され、安心して話せる人間関係を育むために、一緒にご飯を作って食べるなどリアルな食を通じたコミュニケーションの場をつくる必要があるのではないかな。

(2) 自己肯定感の育み

- 学習指導要領では、言語と体験が打ち出されている。言語を支える体験が弱くなっているため、体験を語る言語が弱くなっているのではないかな。その時に、承認ということが大事になってくる。結局、大丈夫だと言ってもらえる関係を作っておくことが必要で、その中で例えば変わっていく自分をわくわくするとか、相手も変わってきてすごいと思えるという関係を作ることが、地域社会での活動にもかかわってくると思われる。
- 家庭でできなければ、地域や学校でなんとかするという形で、子どもたちを丸々人格としてどう捉え、肯定していくのか、そういう関係をどのようにつくっていくのかということを考えておかないと、子どもたち自身の肯定感を高め、自立させることは厳しくなるのではないかな。

(3) 保護者へのアプローチ

- 日本の子どもたちの自己肯定感が低い背景には、保護者が「正しい親」になろうとしていることと関係が深いのではないかな。正しい親だとみられたい保護者が、世間体に縛られ、情報過多の中で過剰な情報を手に入れ、早期教育に熱心になることで、子ども・若者のストレスが増えているのではないかな。
- 青少年期になり、ひきこもりになってから保護者支援をするのでは、効果が小さいのではないかな。行政は、年齢の低い子どもから青少年まで全体を考えた保護者支援の連携をしていく必要があるのではないかな。

3 情報ネットワーク社会への対応

(1) 情報ネットワーク社会における学び

- シンギュラリティ⁵や人生100歳時代は、何を学べば（教えれば）よいのかわからない時代の到来を予期する。何度もスキルや価値観を学び直す人生になることを前提に、学校教育・社会教育はデザインされるべきではないかな。
- 多くの子ども・若者が、テクノロジーに「遊ばれる」、「コントロールされる」のではなく、テクノロジーを使って新しい「遊び」や「社会」を生み出していくとい

⁵ シンギュラリティ：人間の知性を人工知能（AI）が超え、加速度的に進化する転換点。米国の未来学者、レイ・カーツワイルはその時期の到来を2045年と予想する。人間が担ってきた高度で複雑な知的作業の大半をAIが代替するようになり、経済や社会に多大なインパクトをもたらすと考えられている。（2019.1.1日本経済新聞引用）

う姿勢を身につけ、実践する機会を提供することが重要になる。

- 自分たちが社会を作っていくというマインドをどうやって持てるかということが、情報技術の教育に非常に重要ではないか。
- 情報技術を社会に導入することによって、単に便利、儲かるではなく、人間が幸せで元気になるかどうかという「Well-being」という基準を持って開発していくべきではないか。
- 情報技術によるコミュニケーションは、「仮想のコミュニティ」ではなく、リアルな人間関係を維持する基盤になっている。大人が率先して、情報技術を受容して利用していくことが大切ではないか。その際に、単に便利だから、お金が儲かるからということではなく、「Well-being」な指標や概念が新しいポイントになるのではないか。

(2) 価値創出におけるプロセス

- 現在、バーチャル空間で飛び交っている情報は日常的なものが多いが、芸術や学術といった非日常的な価値を創造する場ができないだろうか。それにより日常的な感覚によって情報発信しているところから抜け出せるのではないか。
- これからは、以前のように育成し、同じような能力を備えた人を育て、労働力にしていくという教育ではなくなるだろう。関係の中から、思わぬことが起こるといった力を発揮するといった形になっていくのではないか。同じ方向に向かって成長、発達するのではなく、日々多角的に多方向に変わっていくことを認めて、背中を押してやるという関係に入るのではないか。それをこれからは、教育とよぶことになるかもしれない。

第4章 議論の方向性

1 情報ネットワーク社会における若者の信頼関係と成長

～信頼のあり方は多様化しているのか。成長につながる信頼関係とは何か。

- 小学校の高学年や、中学生、高校生にとって、LINEなどのSNSによる友達とのやり取りは、会話と同じという認識がある。友達と繋がっていたいと、LINEで一晩中繋がり、誰かが発信したことに「うん、うん」など相槌を打つだけのやり取りが続くこともある。また、SNSによる会話では、信頼が失われないように丁寧なやり取りを心がけていると感じる。若者の中ではSNS上の信頼関係を育むことがとても大事になっていると思われる。これは、大人が近所や地域の人と丁寧にお付き合いをするということと同じような感覚なのではないか。
- メディアを通じた情報発信・受信は、部分的で不完全なものである。例えば、テレビのメディアには、情報発信する側の主観的な意図や、情報を部分的に切り取り、ある一定の情感を押し付けているのではないかという批判が伝統的にある。SNSによる情報発信・受信についても同様に部分的な情報のやり取りであり、信頼関係を生み出すほどのコミュニケーションにつながるのかが問題なのではないか。部分的な情報のやり取りから生まれてくる新しい形の信頼関係は、人間を成長させるのだろうか。
- 「VUCA」の時代という言葉に象徴されるように、不確実で複雑な時代となっている現在、信頼のあり方も非常に多様になってきているのではないか。信頼の質や形が、流動化する社会の中で変わってきているとみることもできるのではないか。そうした信頼が、成長に繋がるのか、あるいは成長に繋がる信頼にはどのような要素や、条件、環境が必要なのだろうか。
- 情報ネットワーク社会における信頼は、SNSで発信する相手が特定であるのか、不特定多数であるのかにより条件が違ってくるのではないか。相手が不特定多数の場合、信頼性など何もないのではないか。その点が問題になっているのではないか。相手の顔が見える場合と、見えない場合では、話し方なども違うのではないか。
- 大学生の間では、SNSの使い方として、LINEはおしゃべりで、FacebookやInstagramは、友達と過ごしている様子などを動画で発信していることが多い。また、文章を書くことができる人は、今の自分の思いを表現しておき、後で振り返る材料にしているケースがある。さらに、大学生には、セルフブランディングのような意識があるように思われる。意図的に発信する情報を選択して、こういう私というものを作っているのではないか。不特定多数への情報発信においても、自分のことをどのように見てもらいたいかということを意識しているのではないか。
- 今の若者は、安心して自分を表現し、ありのままの自分を受容されてきた経験が薄い世代なのではないか。その癒しなのか、SNSで自分のことをわかってほしいと、動画などで表現し、自分の心象風景を言葉にしないのではないか。自分が傷つきたくないという、言葉にすると否定される気がして、LINEのスタンプで今の気持ちはこの

ような感じと誤魔化しているという印象も受ける。こうした中で、人間を成長させるようなSNSのやり取りは難しいと感じる。傷ついてきた自分は、これ以上傷つきたくないから、同質の仲間からエールが欲しいが、自分が発信したことを通じて、相互に談義し、自分を深めていこうという方向のメディアにはならないのではないかと。

2 曖昧なコミュニケーションと人間関係

～曖昧なコミュニケーションにより、人間関係も曖昧になっているのではないかと。

- メッセージのやり取りの基本的なコアの部分は言語であり、言語により社会も運営されてきた。自分の考えを言語化すると、それに対する批判というものは生じるものである。それが議論ということであり、デモクラシーの基礎となっている。しかし、批判だけであると、非難や誹謗中傷になる可能性もあるため、防御的になる。今の若者は、言語だけではなく、漫画やイラストなど多様なメディアがある環境の中で育ってきている。言葉で表現することで非難されるのであれば、スタンプや写真などを使う方がいいと、言語に対して消極的になるのではないかと。
- 曖昧なまま進むコミュニケーションでは、気持ちを読み取ることは難しく、齟齬が生じるのではないかとと思われるが、ある程度の範囲の中で少々ずれたとしてもコミュニケーションは進んでいく。これまでは、相手が出した情報の意味を的確に受信するようにされてきたが、今のコミュニケーションは厳密ではなく、ある幅の中で進む「曖昧なコミュニケーション」というものがあるのではないかと。
- 若者は、自分は傷つきたくないし、相手のことも傷つけないだろうという想像のもと「曖昧なコミュニケーション」をしているのではないかと。とても繋がっていたいけれども、深めたくはないということではないかと。これまでは、お互いに分かり合うということが信頼だと考えられてきたが、今の若者の思っている信頼の質や幅は違うのではないかと。
- 若者の対面でのコミュニケーションでも、波風をたてずに曖昧なまま、お互いに気持ちを共有しているという繋がり感のまま進み、うまくいかなくなるということがあると感じる。物事をはっきりさせ、白黒つけることや、自分の考えが異なることを表明する勇気がなく、その場にいる誰かが何とかするだろうと、曖昧なまま終わることがある。それは、成熟していないからなのだろうか。
- ひきこもりや生きづらさのあるような困難を有する若者には、白黒はっきりさせることやゼロか100しか考えられないという特徴を持つ人が多いと感じる。そうした人は、「曖昧なコミュニケーション」が進む場に居づらくなるのではないかと。なんとなくスタンプを送信できれば楽だが、それができずにこだわる若者は、生きづらさを感じるようになるのではないかと。
- 困難を有する若者の場合、居づらい場から抜けて別の仲間と関係を深めることは難しい。また、LINEのグループの中に一人異質な人がいると、その人を除いたグループを作り、いじめに繋がることになる。大人数のグループの中でも、熱意のある人同

士でグループができ、その中でも仲の良い人同士のグループができるというように、小さいグループができていくように感じる。グループの友人は、同じような価値観を持っているため、正確ではなくても、曖昧なままで何となくわかる。居づらい人ははじかれていくように思う。若者には、グループからはじかれないように、とりあえず答えて、皆が向いている方向にいかうとすることもあっていいのではないか。

- 友人関係や仲間関係が、曖昧なコミュニケーションにより快く進んでいくために小さなグループになっていくということは、同質性が高く、とても小さなコミュニティがたくさんある状態になる。これでは、社会性が身につくかわからない状況になっていくのではないかと。また、世の中には、異質な価値観があるという認識が乏しくなってしまうことになるのではないかと。
- 集団が大きなものから小さくなり、分散化していくことは、多様化とは異なる考え方で、自分の仲間だけを集めているということになるのではないかと。
- 若者は、LINEのグループごとに場を規定する感覚があり、場の機能や性質をとっても意識していると感じる。自ら規定した場で、自分の表現を使い分けている。
- 若年無業者を支援する中では、就職して多世代の人と仕事をしたが、価値観の違いから企業で働くことが難しくなり、自分で起業したいと相談にくることがある。自分が育んできた、演じて使い分けてきたコミュニティはあるが、社会に出て異質な価値観の中ではなかなか生きていけない。一方で、生きていける若者もいるが、その違いは何だろうか。
- リアルな対面を前提として、お互いの思いを吐露しあった経験のあるグループだとSNSでの自己開示もとても進むが、SNSの関係だけだとそうはならない。対面とSNSの活用というセットでコミュニケーションが深まっていくのではないかと。
- 自分の意見を他人が受け入れるか、受け入れないかということに気にせず、他人に関心がない若者がいるのではないかと。そうした若者は、自分の意見と違うため、相手が反論するだろうということまでは、気にしていないのではないかと。自分の意見に反論され、それに対して反論するということは面倒だと感じる。
- コミュニケーションの曖昧さは、感覚を共有するよりも言語によってしっかりと方向性を決めたり、意味をしっかりと確定させていくことでずれが生じるのではないかと。また、LINEで自分の意見を長文で送ってくる人に対してスタンプ一つで返信するなどコミュニケーションの「熱量の差」があるとなかなか話が進まず、お互いにイライラすることがある。
- ある若者が突然予定をキャンセルするときに「ごめんなさい」とだけSNSで送信してきたことがある。謝るときには、ただ「ごめんなさい」と伝えるだけではなく、そこに至った背景も含めて説明しなくては受け入れてもらえないと考えられないのかもしれない。自分がしたことが誰に、どのような影響を与えるのかという想像が働かず、そうしたところも曖昧になっているのではないかと。
- 自分がしたことで、誰かに迷惑をかけることになると思えば、謝罪の言葉とともに、理由を説明するのではないかと。そうしないのは、人間関係がみえておらず、体験

の不足により想像力が働かないからではないか。

- 一方、若者支援している中で、若者から「これをする意味は何ですか」、「社会に出るという意味が分からないので教えてください」といった背景を聞かれることがよくある。
- 若者にとって、感情という曖昧なもので繋がっていくコミュニケーションの空間が日常的にあるとすれば、言葉できちんと説明することは、怖いことなのではないか。言葉で説明すると分かり合えないのではないかとといった恐れをどのように緩和し、フォローできるのだろうか。
- 青少年の健全育成支援については、今の若者像を念頭に議論していく必要がある。今の若者の多数派は、「曖昧なコミュニケーション」により人間関係を築き、その人間関係も曖昧で、信頼の質や形も変化しているように思われる。体験活動は当然必要であり、重要であるが、その絶対量は不足している。今の若者像を前提とした、別の方法で健全育成を支えられないかということを考えなくてはならない時期に来ているのではないか。

3 親子のコミュニケーション

～親子のコミュニケーションも曖昧ではないか。親子で地域にでる機会が必要ではないか

- 子どもが育つプロセスの中で、親が先回りをして子どもの気持ちをくみ取り、親が判断してしまうことが多くなっているのではないか。子どもの成長のために、子どもの気持ちを深く問う、丁寧に語り合うという親子関係ではなくなっているのではないか。簡単に理解しようとする親子関係となり、子どもも、親も社会での人間関係にそのまま通用するかのようになっているのではないか。
- 家庭が小さな社会であると捉えると、親が子どもの気持ちを確認せずに深めていないことが多い。家庭内にも「曖昧なコミュニケーション」があり、そのことが他とのコミュニケーションに影響しているのではないか。
- 今、子育て支援の現場では、就学前の子どもたちが、自分の心の中に社会的な存在として他者を受け入れ難くなっているのではないかという指摘がある。保護者も子どもを他者として見ておらず、親子で依存していることが多いのではないか。それが青少年になってからのコミュニケーションのありように影響しているように思われる。
- 同じ家の中にいるのに、親子が SNS で連絡を取っていることがある。夜中に帰ってきた子どもが LINE で「ごめん、おやすみ、寝る」という発信で終わり、親も子どもに何か事情があったのだろうかと問い詰めることもしない。親子でさえ、コミュニケーションを対面でとることが薄れ、気持ちを言葉にして説明しようということがなくなってきているのではないか。自分のことをわかってほしいという子どもは増え、自分の気持ちを受け止めてくれないと怒りになってしまう。ベースとなる家庭での親子関係が崩れていることで、感情を言葉にして伝えられなくなっているのではないか。
- 親が「どうしてそうなの」と尋ねて、子どもが想定外の返答をした場合、親がすぐ

に怒ってしまい、子どもが何も言わなくなるということがある。親が1分でも2分でも子どもの言い分を聞き、「間（ま）」をあけて受容するということが、育まれず、養われていないのではないか。

- 今の子どもたちは、複雑で曖昧な社会に出て行くという状況であり、親世代が育ってきた社会とは異なっている。0歳から6歳くらいの子を持つ親が、子どもへの対応の仕方を学べる機会をつくってはどうか。
- ある団体では、子どもが何か攻撃されたときに「やめて」と言うなど、シチュエーション別に子どもが、自分の気持ちをどう伝えるかというソーシャルスキルを高めるトレーニングをしている。幼児から小学校2、3年生くらいまでの子どもを対象としており、親子で参加することもできて、親から支持されている。
- これまでは、家庭教育の中で社会力のようなものが育まれてきたが、今は親も何が正しい答えなのかわからず、ソーシャルスキルトレーニングなどに頼るということがあるのではないか。
- ある親子参加型のキャンプ募集では申し込みがなく、子どもだけの参加に変えた途端に、多くの申し込みがあった。親は子育てについて、誰かに何とかしてほしいと考えている。子どもがキャンプなどに参加している間に、親は自分がほっとしたいという気持ちもあるのではないか。
- 子育てに意識が高い親は、過干渉、過保護になりがち傾向があり、意識が低い親だと子どもに無関心でネグレクトのような状況になるという二極化している状況があるのではないか。
- 子育てをしている親が、他の親子がどう接しているかを見る機会が減っているが、他の親子の関わりを見ることは、とてもいい学びになる。一方で、SNSなどでキラキラ光る親子関係を目にする機会は多く、親たちは苦しい思いをしているのではないか。
- 親の考え方が、子どもの考え方だと思っている親こそ、いろいろな社会体験を通じて親として育つことはとても大切である。地域では、子どもを対象としたイベントを実施する際に、学校に協力してもらい、全児童が対象となるようにした上で、多くの保護者が参加に前向きになるような仕掛けをつくることも必要ではないか。
- 子どもや若者が、人間関係の中で他者を意識していないと、コミュニケーションや、信頼関係が不十分なものになるのではないか。そうすると、若者の社会参加や職業参加、地域の活動が乏しくなっていくのではないか。

第5章 実践検証事業～青少年のコミュニケーションに関する意識調査

1 実施概要

(1) 方法

企画調整部会委員が、各々で関係している青少年にインタビューした結果を集約する。インタビューでは、第4章の議論の方向性を柱に質問を行い、その結果を集約することにより、青少年の意識を把握する。

＜インタビュー質問の柱（第4章 議論の方向性）＞

- 1 情報ネットワーク社会における若者の信頼関係と成長
- 2 曖昧なコミュニケーションと人間関係
- 3 親子のコミュニケーション

(2) インタビューの対象

小・中・高校生、大学生、20代の社会人など対象年齢を幅広く設定するとともに、生きづらさを経験した人など多様な青少年を対象とする。

(3) 実施期間

令和元年7月から8月

(4) インタビューの形式

インタビューの形式は、1対1や複数人に対して同時に行うなど、委員が関係する青少年に合わせ、実施しやすい形式で行う。

2 実施結果

(1) インタビュー対象者の状況

ア 対象者

人数 42名（男性21名、女性21名）

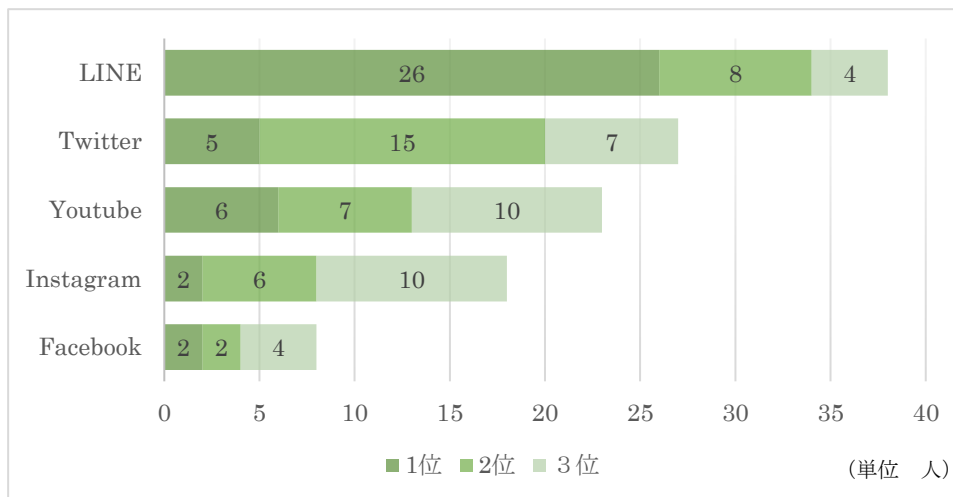
内訳 中学生1名、高校生8名、大学生24名

社会人(20代)8名、社会人(30代)1名

居住地 県内38.1%、県外50.0%、不明11.9%



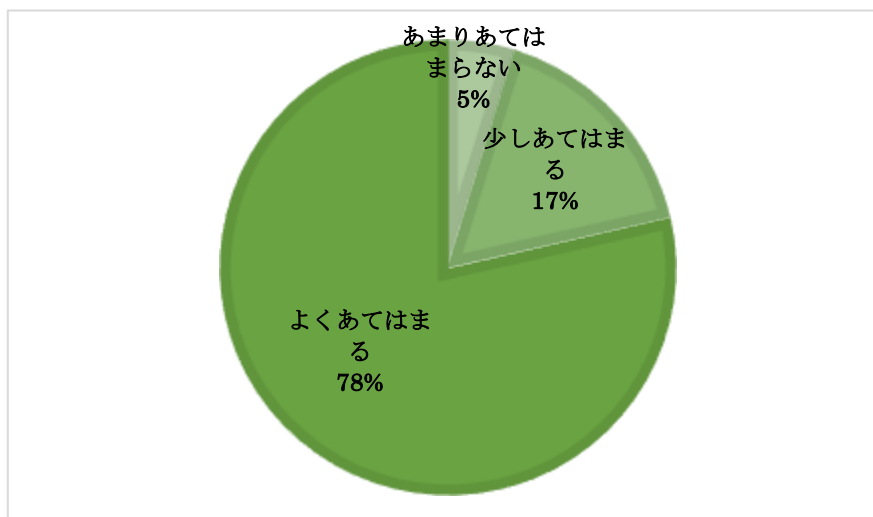
イ 使用しているソーシャルメディアの状況



- ・ 1位 LINE 主な目的 家族・友人との連絡手段、友人とのコミュニケーション
- ・ 2位 Twitter 主な目的 情報収集、友人や芸能人の投稿確認、暇つぶし
- ・ 3位 YouTube 主な目的 動画・音楽の視聴、自分が投稿する
- ・ 4位 Instagram 主な目的 友人の投稿確認、自分が投稿する
- ・ 5位 Facebook 主な目的 知人・友人の投稿確認、イベント情報の収集

ウ SNSの活用に関するアンケート結果

① 友人とのコミュニケーションにSNSを活用している

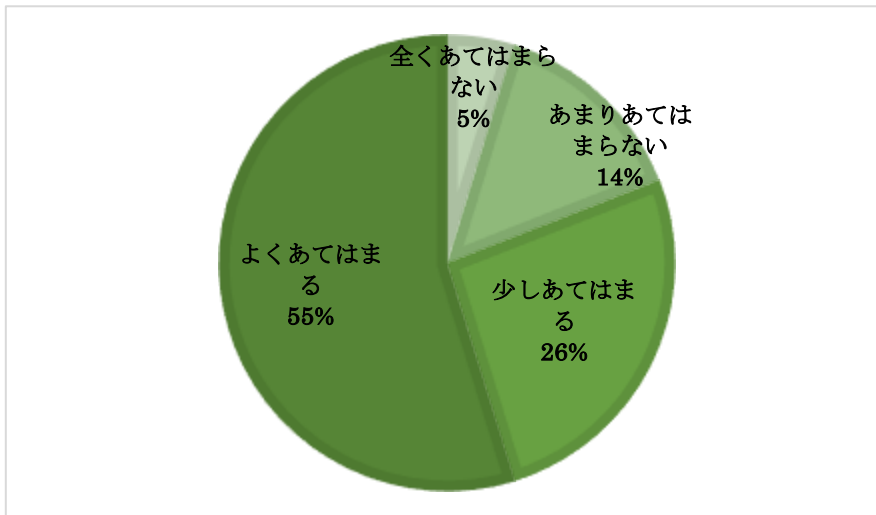


(関連するインタビューコメント)

- ・ 友人との事務連絡や会話に、LINE を使う。
- ・ Twitter、Instagramでは、友人の投稿を確認する。
- ・ 友人との連絡ではLINEを使う。友人の電話番号やメールアドレスを知らないことが多い。
- ・ LINEでは、文字のやり取りが多いが、早く伝えたいことや伝えることが多いときにはLINE電話を使う。

- ・LINEで文章を書くことが苦手な人がいる。現実でコミュ障の人がSNSでも同じになることがある。一方で、現実ではコミュニケーションが苦手でも、LINEでは明るい人だと感じることがある。
- ・グループLINEでは、大勢がコメントのやり取りをするので、自分は発言しなくてもいいかなと思うことがある。ふだんから発言する人同士が会話を進めていく。
- ・Instagramに投稿していたが、友人と自分を比較して疲れてしまい使用を止めた。

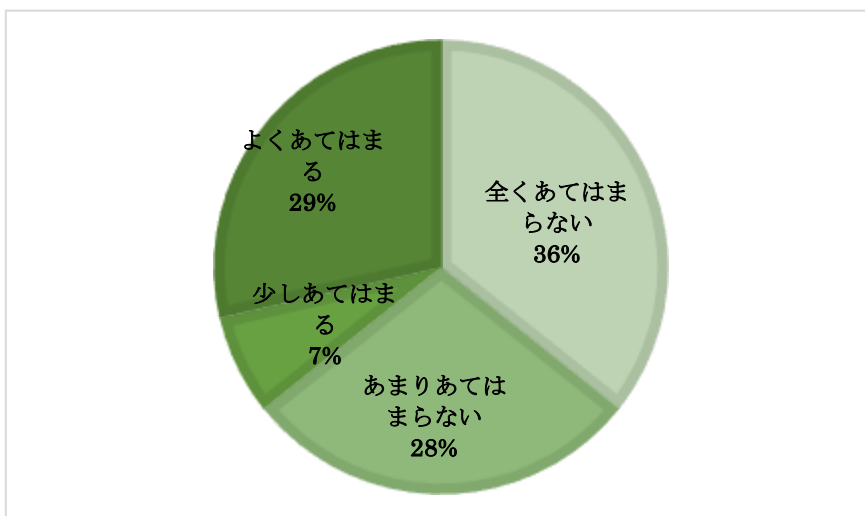
② 家族や親せきとのコミュニケーションにSNSを活用している



(関連するインタビューコメント)

- ・親とは、事務連絡でLINEを使う。
- ・親とは、お天気や出かけ先での様子を撮影した写真を送るが、気持ちを話ことはあまりない。
- ・親に面と向かって言いづらいことや謝罪をするという使い方をする。
- ・母親は自分のことを把握したいという傾向があるため、Facebook、LINEのアカウントを全て開示している。開示することで、母親のストレスがなくなるのであれば、それでよいと母親に伝えている。

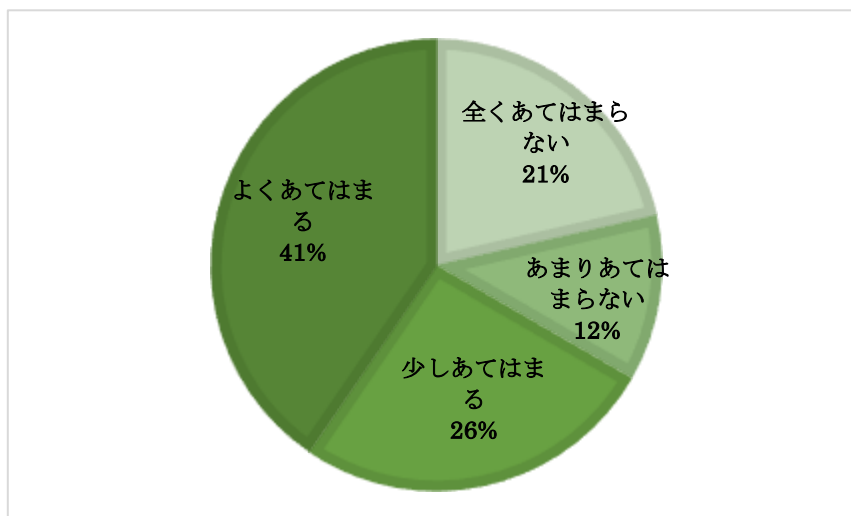
③ 面識のない他人や不特定多数の人とのコミュニケーションにSNSを活用している



(関連するインタビューコメント)

- ・ Twitterの「趣味アカ」をつくり、趣味のことをやり取りする。
- ・ YouTubeでは、ゲームの攻略動画をみて、コメントをしている。
- ・ Instagramでは、写真を投稿し、ほとんど知らない人がフォローしている。リアルとの差があるため、リアルの友人とは繋がっていない。
- ・ オンライン上で、友人や知らない人と一緒にゲームをすることがある。
- ・ 「趣味アカ」を2つ持っている。繋がっている人はアカウントごとに異なっている。

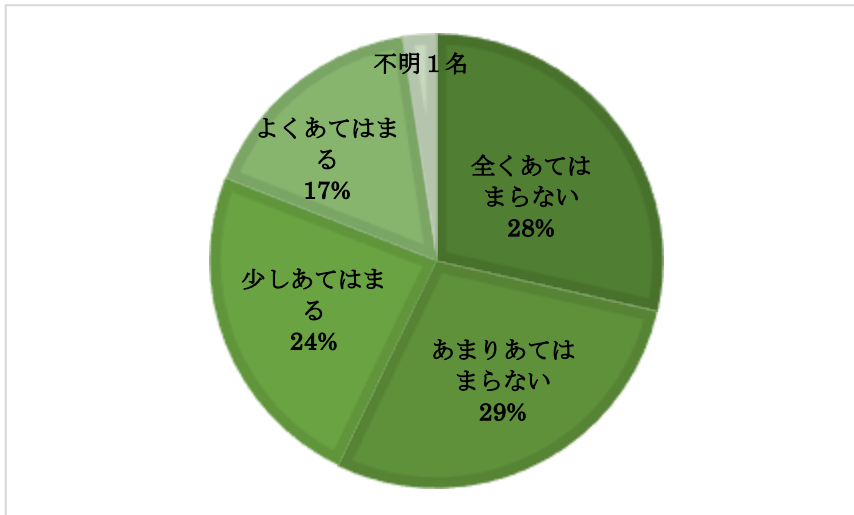
④ 友人の投稿へのリアクションや、コメントを書き込むことがある



(関連するインタビューコメント)

- ・ Twitterでは、友人の投稿に、リツイートで冗談をいうことがある。
- ・ 友人間の「いいね」は、お礼の気持ちや見ましたという挨拶的な感じである。
- ・ 自分が「いいね」を押すときは、自分に利益があったと思う時で、そうではないと押さない。
- ・ 友人の投稿では、自分に関係がある話題のときにのみコメントをする。
- ・ 友人の投稿に、おもしろいと思ったことがあった場合でもコメントをせずに、会ったときに直接言っている。
- ・ 友人のInstagramのストーリーをただ見ていることが多い。

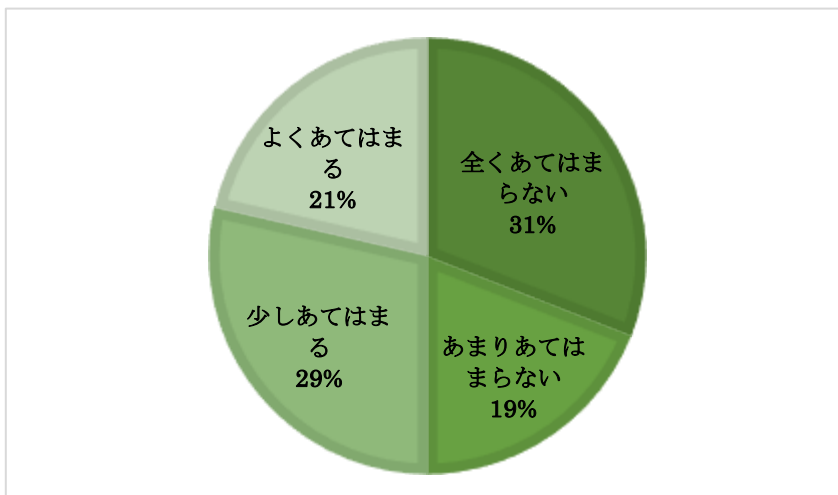
⑤ SNS等に自分の日常や友人・家族と過ごした時の様子等を文章で投稿することがある



(関連するインタビューコメント)

- ・Twitterでは、特定の友人とやり取りするアカウントをつくり、悪口や愚痴を書き込む使い方をしている友人がいる。
- ・Twitterでは、「趣味アカ」をもち、作品を投稿しているが日常の出来事を投稿することはない。
- ・SNSで投稿しない理由は、自分の主張が記録として残ることが怖いということがある。
- ・自分の日常生活をSNSに投稿することはない。

⑥ SNS等に自分の日常や友人・家族と過ごした時の様子等を写真や動画で投稿することがある



(関連するインタビューコメント)

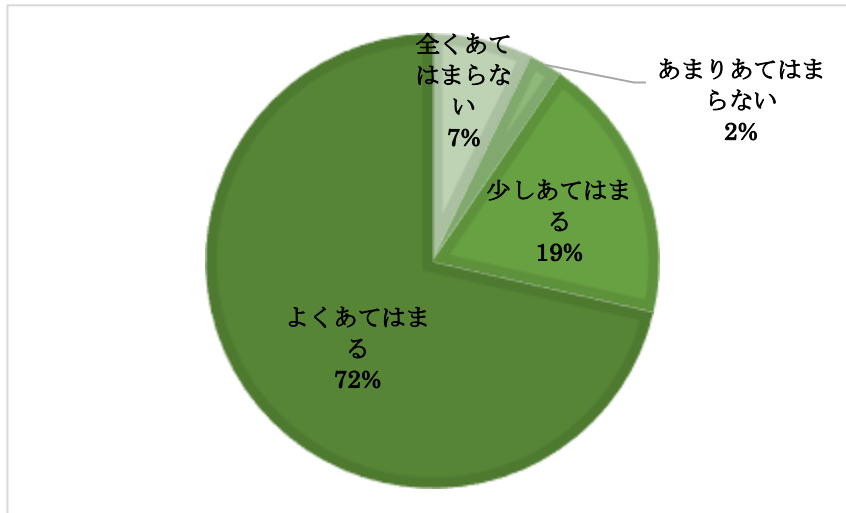
- ・SNSでは、文字よりも写真や動画のほうが伝わりやすいと思う。
- ・Twitterの投稿では、投稿した映像の効果を文章で補足し、伝える効果をあげるよ

うにしている。

- ・ Instagramでは、楽しいとき、感情が動いたときに写真・動画を投稿している。
- ・ Instagramでは、公開範囲を限定して、友人と一緒にいる動画を投稿する。文字では投稿しない。
- ・ Instagramのストーリーは24時間で消えるため、手軽に投稿できる。

エ SNSの使用により感じていることに関するアンケート結果

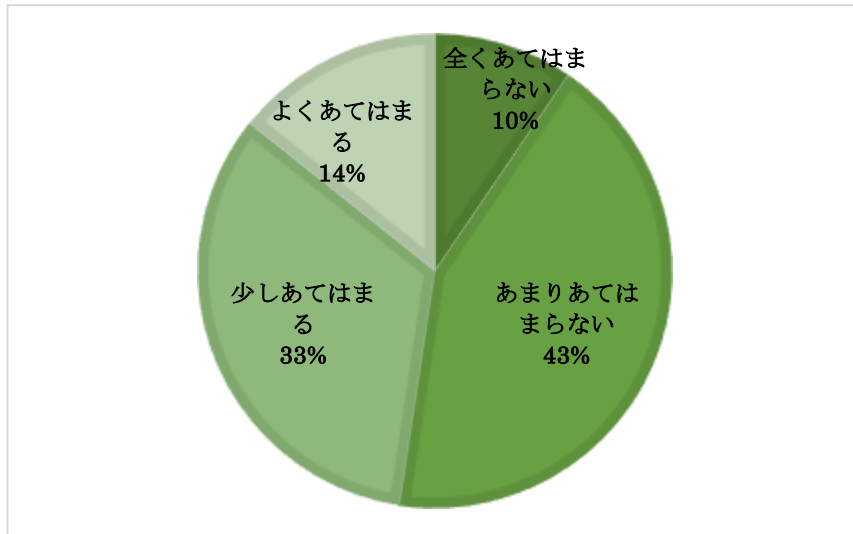
① SNSは日常生活になくてはならないものになっている



(関連するインタビューコメント)

- ・ SNSがないと生活は成り立たない。LINEは連絡手段、Twitterは情報収集、YouTubeは暇つぶしに使っている。
- ・ スマホを使わない日を設けるとしたら、予めその時間はスマホをみないことをTwitterやInstagramで宣言しておかないと怖い。
- ・ LINEは連絡手段なのでないと困るが、そのほかのSNSはなくても困らない。
- ・ 携帯をもっていなかった頃は、友人との連絡は電話だった。連絡手段ということに関しては、なくてはならないものではない。

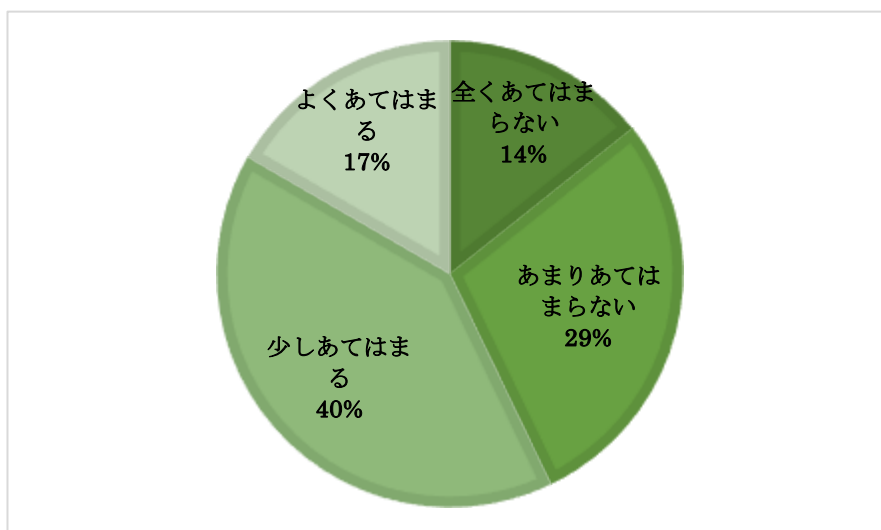
② SNSがあることで、友人や家族との絆を感じられる



(関連するインタビューコメント)

- ・友人との絆は、SNSでも感じられる。
- ・SNSで常に連絡を取り合うことができることは、友人関係や信頼関係を深めることに役立つと思う。実際の距離に関わらず、精神的に近い距離になると考える。
- ・友人に共感して欲しいことがあるとInstagramやTwitterに投稿する。
- ・Facebookでは、投稿に対して皆が「いいね」と反応しないとならない感じがする。
- ・SNSでの友人とのやりとりは、連絡事項のみであるため、信頼関係が深まることはない。
- ・SNSでは自分の見せたいところしか見せないということはある。
- ・LINEの嫌なところは、グループのやりとりだと返信の責任が薄くなること。

③ SNSがあることで、自分の今の気持ちや感情を表現しやすい

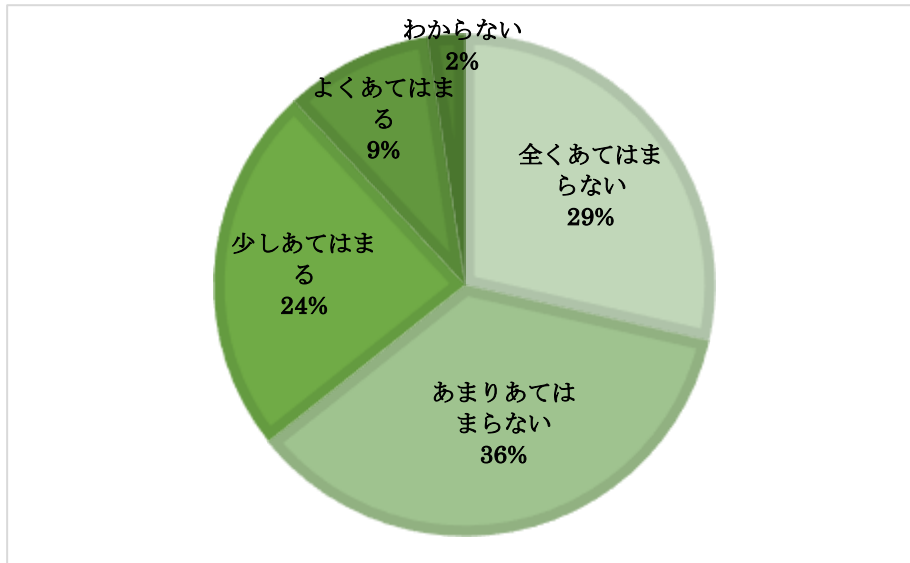


(関連するインタビューコメント)

- ・メッセージのやり取りをする人は、仲がいいので気持ちを伝えられる。

- ・ SNSでは素直に自分の気持ちは言えない。
- ・ LINEは連絡手段であって、雑談をする意味が分からない。

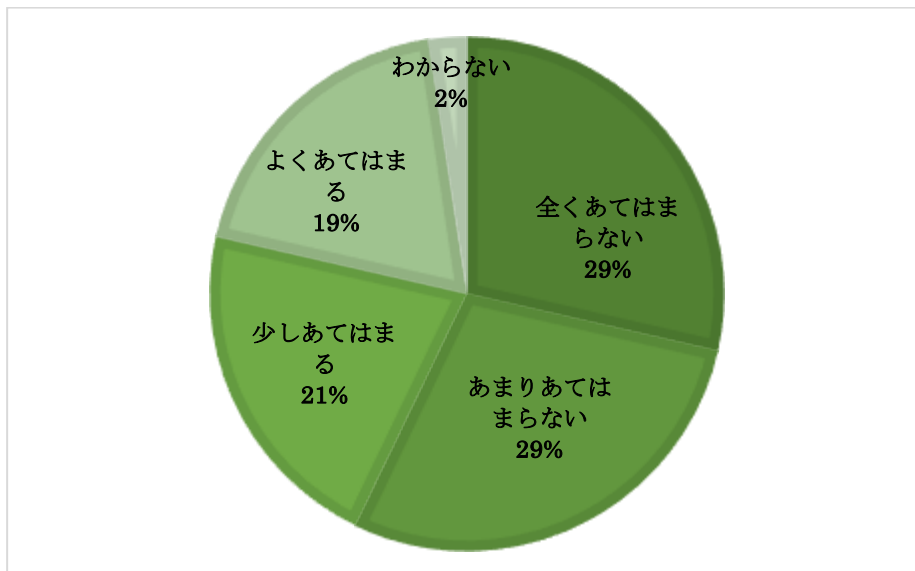
④ SNSがあることで自分の悩みや抱えている問題を相談しやすい



(関連するインタビューコメント)

- ・ 自分の悩みを相談するときにSNSを使うことはない。相談したいときには、直接会って、話をしたい。
- ・ LINEで悩み事の相談をされることがあるが、文字でやり取りすると伝わり方が違ってしまうことがあるため、会って話をしたい。
- ・ SNSで友人のあたり障りのない相談には乗る。SNSだと自分の気持ちを抑えないので言いすぎてしまう可能性があるが、対面していれば多少は抑えられる。

⑤ SNSがあることで自分のオリジナリティを表現しやすい

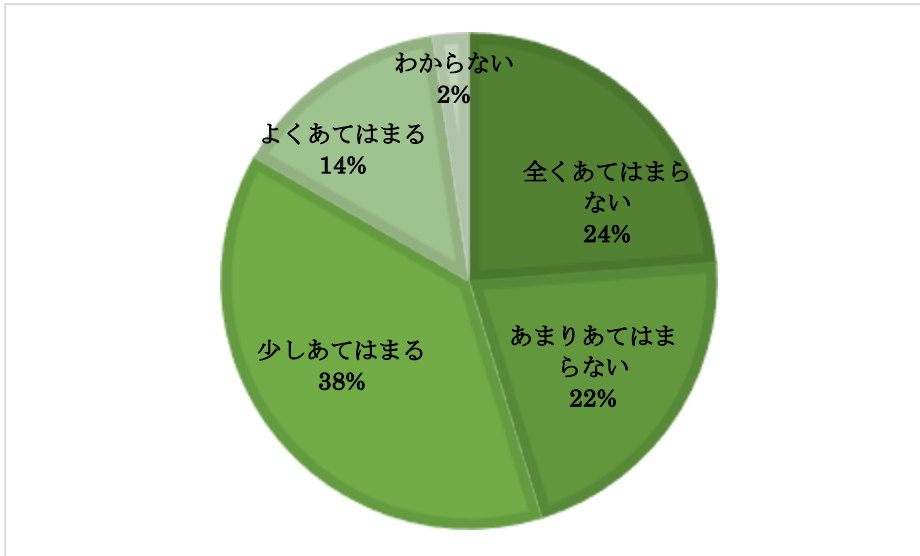


(関連するインタビューコメント)

- ・ SNSで自分を発信することで、自分はこういう人間であるということ表現できる。
- ・ SNSで自分のオリジナリティを表現することは考えない。自分のオリジナリティは何

かという悩みはある。

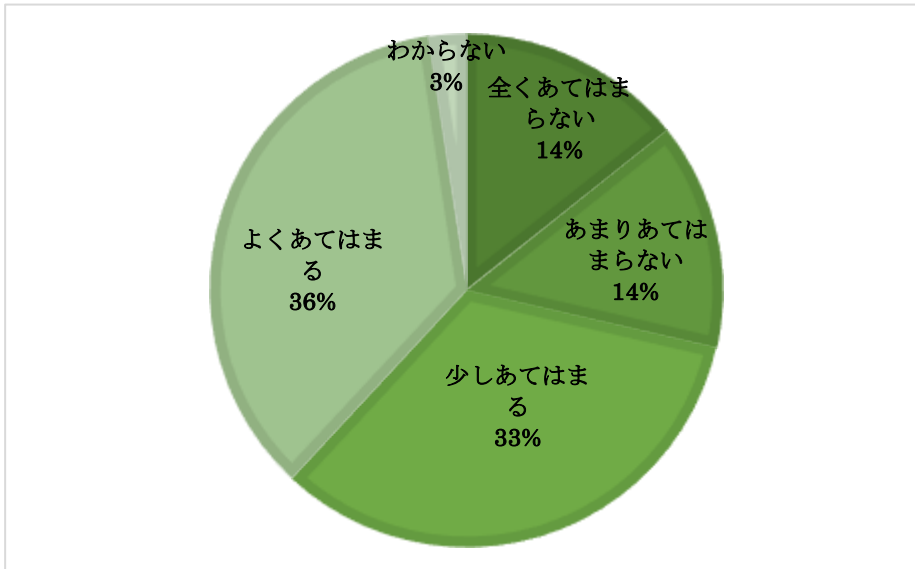
⑥ SNSがあることでこうなりたい！や目標を見つけることができる



(関連するインタビューコメント)

- ・Twitterでフォローしている有名人の投稿をみて、目標や夢につながることに出会えることはある。一方で、いいなと思う投稿を見ても、自分が深めることはしないため、Twitterをみることは時間の浪費につながると思う。
- ・Facebookは、本人名義であることからリアルとネットが共存しており、それを増やしていこうというイメージがある。ただし、今自分はそれを求めているので使っていない。

⑦ SNSがあることで知人友人の輪が広がり、知らないことを知ることができる

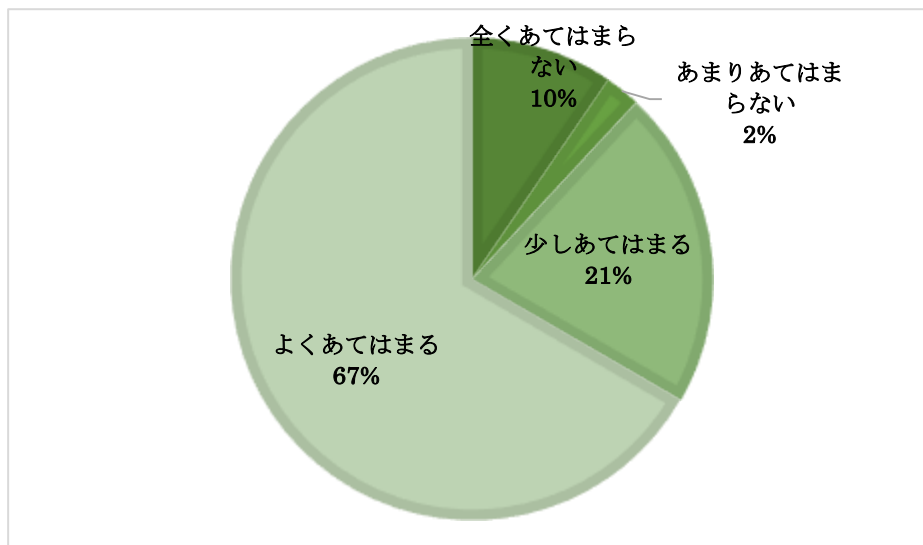


(関連するインタビューコメント)

- ・あまり話したことがなくても、Instagramの投稿にリアクションがあり、そこから繋がりが広がることはある。
- ・Facebookは、地域関係、趣味の知人が多く、自分の興味のある分野でどのようなこと

が行われているか知見を広げるためのSNSとして使っている。LINEやInstagramと違い、丁寧に表現している。

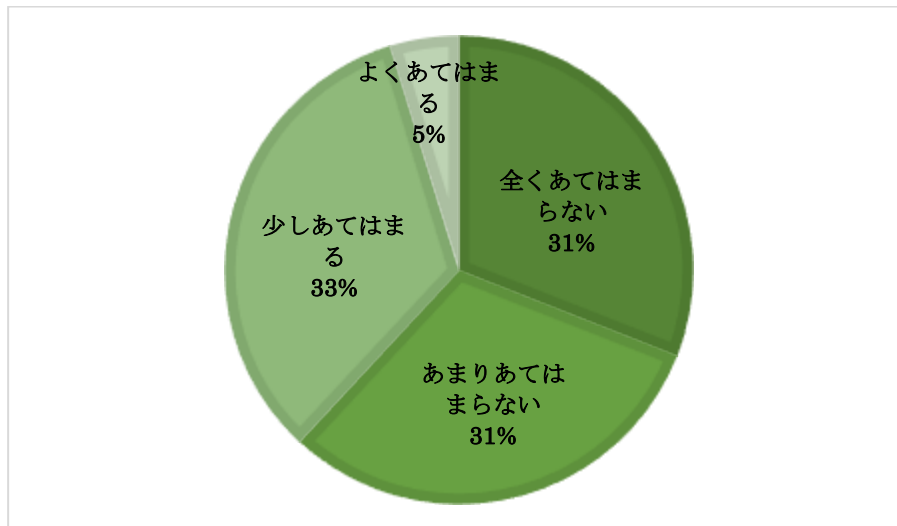
⑧ SNSがあることでつい時間を浪費してしまったことがある



(関連するインタビューコメント)

- ・暇つぶしにTwitter、YouTubeをみていて時間を浪費していると感じる。
- ・Instagramでフォローしている友人のストーリーの動画が流れてきて、ずっとみてしまうということがある。

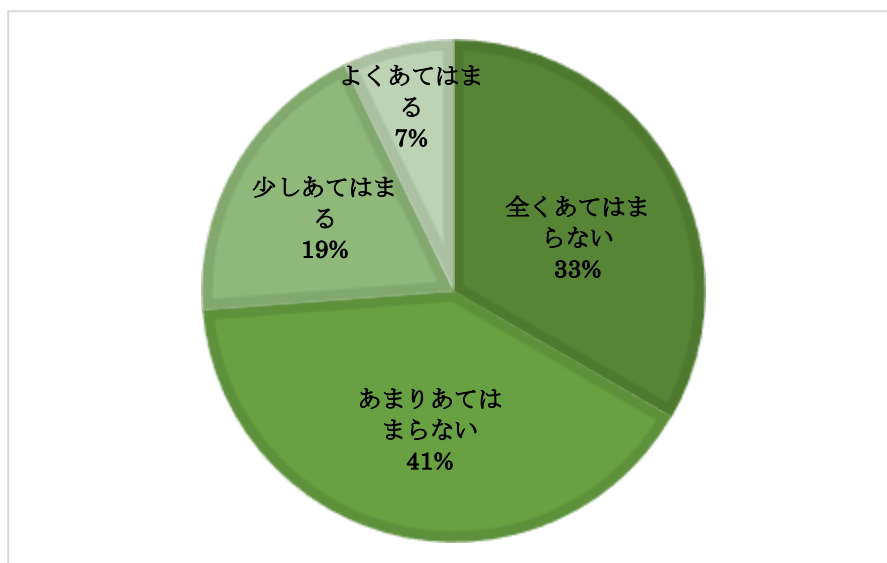
⑨ SNSがあることで人間関係のトラブルや嫌な場面に巻き込まれることがある



(関連するインタビューコメント)

- ・自分が繋がっている2人の友人の裏アカで、双方が悪口を言っており、別々に相談を受け、対応に苦慮したことがある。
- ・自分を含めて3人のLINEグループで、2人の友人が言葉尻をとって喧嘩になることが多く、その仲裁をすることが大変である。

⑩ SNSがあることで友人と自分を比較したり、悩んだりすることがある



(関連するインタビューコメント)

- ・他人の投稿をみても、感情は動かない。
- ・自分の投稿に「いいね」が来ないとあれっとなる。Instagramの設定では「いいね」が表示されなくなったので心の負担が減った。
- ・SNSをなくしたい。入ってくる情報量が多く、疲れる。
- ・Facebookでは、意識の高い、活動的な人が投稿するがそうしたことで、友人と自分を比較して悩むことはある。劣等感を感じるわけではないが刺激される。
- ・Facebookへの投稿は、年上の人が見る関係で気軽に投稿しづらい。

(2) インタビュー発言の状況

ア 情報ネットワーク社会における若者の信頼関係と成長

<信頼関係>

- SNSでの友人とのやり取りは、連絡事項のみであるので、友達との信頼関係は、SNSでは深まらない。また、SNSでの出会いが初対面の場合、文字で会話をすることになるが嘘をつくことが多いと思うため、信頼関係は深まらない。
- 信頼関係をSNS上で構築していくという考え方はない。SNSは、信頼関係が現実で構築された人とのコミュニケーションツールのひとつとして使っているため、SNSをすることにより信頼が生まれることや、関係性が濃密になることはないと思う。
- 常にSNSで連絡を取り合うことができるということは、友人関係や信頼関係を深めることに役立つと思う。位置や距離が関係なく、精神的に近い距離にいられる部分があり、常に繋がっていられるというのは信頼関係に繋がっているのではないかと思う。
- 知らない後輩から、Facebookで友達申請があり承諾した。実際に会った時に自分のことをよく知っているように接してきたが、自分に近づきやすくなっているけど、

人間関係として近くなっている訳ではない。

- 友人との絆は、SNSでも感じられる。
- 実名ではないSNS上のだけの関係であれば、信頼関係が成立すると思うが、現実の場で会うこととは別のことだと感じる。
- ネット上でも自分が生活していく中で思ったことや考えを聞いてくれる人がいて、自分のことを見守ってくれる人がいると居場所だと思う。
- LINEよりメールがいい。LINEはテンポよく返さないとならないと感じる、既読が付く、付かないことを友人に言われることはないが、気にされているのではないかと心配になる。
- 顔がわからないからこそ、言えることもあると思うが、信頼関係は難しいと思う。

<成長>

- FacebookでNPO関係などの人と知り合い、活動に参加することは、SNS上で成長したというより、成長するきっかけになっている。
- 人間性の成長ではないが、Twitterなどで、知らない人と趣味で繋がる場合に、趣味に関する情報やアドバイスをもらいやすく、それが成長につながる面はあると思う。友達のアドバイスも、知らない人からもらったアドバイスも両方とも大事だが、いろんな人からもらうことが大事だと思う。
- SNSでは、経験値的なものは簡単に手に入る感じに見受ける。YouTubeでは、自分がやってみたいことを実際にしている状況を簡単に見ることができる。同じことを自分でやる場合には時間がかかる。文章で読むより、動画の方がノウハウは得やすい。
- 成長になるかはわからないが、SNSで多くの知識をえることはできる。それが正しいかは自分で確認しないとにならないが、知識にはなると思う。情報を得たいと思わずとも、友人がリツイートした他人の情報が自然に入ってくるし、自分が登録すれば、興味のある情報が自動的に送られてくる。
- Facebookは、自分の成長に繋がっている。色々な人が自分の近況をシェアしているので、自分とその人との関係では気づかなかったことが手に入る。そこで知った人やイベントを紹介してもらい、今の自分に繋がっている。見知らぬ人からの情報提供やイベントの誘いでも、自分が判断するが、参加するケースもある。
- 自分が制作したものをインターネットで販売し、色々な人に買ってもらうことは成長とは違うが前進したと感じる。
- 自分の作品を投稿することで、作品の質が上がった。投稿する以前は自己満足で終わっていた。人に見せることで、人に見せたいという気持ちがつよくなり、技術力を磨くことができ、向上心が生まれた。

<「いいね」や承認について>

- SNSの「いいね」を多くもらうことが自分を成長させるのかという点について、「いいね」をもらった人が成長するのではなく、「いいね」を与えた人が、相手の

投稿によって成長したということを証明するためのものと感じる。「いいね」を多くもらえることは、自分がいろんな人を成長させてあげられていると捉えられるのではないかと思う。

- 自分が「いいね」を押すときは、自分に利益があったなと思うときでないと押さない。その投稿が面白いとか、自分のためになったなと思うと「いいね」を押す。また、共感という意味で「いいね」を押すこともある。
- フォロワーが多い人は、優れているというよりは、それなりに支持されている人という認識である。
- 「いいね」をされると嬉しい。成長になるかは、わからないが自分が投稿したものに「いいね」されると嬉しいので、どんな投稿をすればいいのか、写真や文章などを工夫するようになった。
- 「いいね」に関しては、年齢も関係すると思う。高校生の時には友人の投稿に全て押すということをしていた。友達に対して、自分が仲良しというアピールで押すことはあると思う。友達によって、「いいね」を押す、押さないがあると気にする人が実際にいた。
- 「いいね」をたくさんもらっている人は、巻き込む人が多いので影響力は大きいと思うが、羨ましいとは思わない。
- 自己満足で投稿しているため、「いいね」を期待していないが、リアルな友人には反応して欲しい。

イ 曖昧なコミュニケーションと人間関係

<自分と相手の意見が異なる場合>

- はっきり言いたいことがあったとしたら、相手を否定するようなことは言わないが、間違っていることは言うかもしれない。
- 曖昧なコミュニケーションをとっていることについて、SNSと現実とであまり変わらないような気がする。
- 自分と異なる意見が出てきたときは無視をする。異なる意見というのは、人を傷つけるような、人格を否定するようなことばや価値観を否定するような言葉は言わないし、言われたら無視をする。面と向かって言われたら返すしかないが、SNSはタイムラグが生じることが当たり前だから無視しやすい。リアルなコミュニケーションをとるよりも自分が傷つかないようにやりやすく、自己防衛という感じである。
- 白黒はっきりさせるコミュニケーションは、気が置けない仲間とでないとできないのではないかな。気を使っている相手だと曖昧なままやり取りが進むことがあると思う。

<SNSの文章で表現された事が自分や相手に伝わらない場合>

- 文字では、相手によって感じ方、受け取り方が違うことがあるため、相手の言っていることがわからない場合は確認している。
- LINEの文字や絵文字のやり取りで、相手に意図が伝わらず、怒らせた経験があ

る。

<「キャラ」について>

- LINEの文章と実際に会って話す感じとテンションが違うと言われたことがある。文章にするとやりやすいこともあるため、キャラを変えるというよりは、自然と変わっているということがあるかもしれない。
- LINEで文章を書くことが苦手な人はいる。現実にいる「コミュ障」がLINE上にもある。一方で、LINEではいい感じなのに実際と違う人もいる、対面でのコミュニケーションが苦手な人でも、LINEだとすごく明るい子だなという人がいる、対面で表現できていないだけで、いい子だと感じることもある。
- 生身の人間1つだが、相手によって態度を変える。例えば、この人にはたくさん趣味の話をするが、職場の人だからきりっとするということがある。別々にアカウントを持つことも同じことではないか。現実でも人によって対応を変えているから、SNS特有のものではないと思う。

<スタンプや絵文字の使用について>

- あいまいなコミュニケーションに繋がると思うが、SNSは文字だけなので、もし自分が相手に意見した時に悪くとられないように、例えば「笑」とつけて表現を柔らかくするなど、誤解されないように気を使っている。
- SNSでは、文章が長くなりすぎないように気を付けている。LINEは、会話の延長上のものなので、短い文章で表現する。自分の意見をぶつけるのではなく、相手の意見も取り入れながら会話をする。
- LINEの会話を終わらせたいときには暗黙のルールでスタンプを押す。
- 顔文字を付けた方が、自分の意思が伝わると思う。相手の発言に絵文字があると大体こういうことかなと捉えることができる。
- スタンプを使わず、句読点だけで終わるLINEの文章は怖いと感じる。特に、自分に非があるときにやり取りをする場合は、自分に非があるという感情でしか判断できず、怖いと感じる。

ウ 親子のコミュニケーション

<親子間のSNSの使い方>

- 親とLINEはしない。メールで事務連絡はある。
- 男女で差があるかもしれない。私（女性）は、友人と出かけている写真を送ることや、雨が降ってきたと家族とLINEをしますが、気持ちを話すことはあまりない。
- 親とは、真剣な頼み事や、喧嘩をして謝るときに使う。面と向かってだと、なぜ悪かったかをいわないとならないが、LINEだとすらっといける。
- 親に気持ちを伝える時にSNSを使うことがある。相談したいことを書いて事前に伝える。伝わらない部分は対面してそのあとで補足する。

<進学や就職など人生で重要なことを決定する場合>

- 親には、進学先や就職先を決定するときに大事なことは直接話す。インターネットの情報も信頼性が高いところしか見ないし、みても参考にするまでで決定打とは

しない。大学受験時に参考にしたのは、予備校など専門にしている人の意見で決めた。

- 親の考えや価値観が全て正しいとは思っていない。家族でも価値観や生き方が違うことはある。
- 重要な意思決定の場では大学進学時や就職先も基本的に親に従ってきた。親以外に信頼する大人は、学校の先生であった。

＜親が子どもの位置情報を把握することについて＞

- 子どもが小さいときには、親が位置情報を把握することはやむをえないこともあると思うが、大きくなってきたら子どもの意向を聞くことが大切だと思う。
- 過保護で、子どもを信用しなさすぎだと思う。
- 安全のためには仕方がないが、子どもが息苦しくなってしまうと思う。位置情報を無効にする方法を探して解除したという例を知っている。親が子どもに出し抜かれることもある。

エ その他

(5歳や小さい子どもに教えてあげたいこと)

- 一度ネットに上がった情報は消すことができないということ。
- ネットの世界は、リアルの世界と比べると子どもだからと許されることがない。大人も子供も関係ないということを伝えたい。
- SNSの使い方ではプライバシーに気を付けてほしい。写真を掲載することはどうということかという認識は持たせておくべきだと思う。感覚の軽さを重くしたい。
- 自分の経験では、もっと早くSNSをやっていたらよかった。持っていないときにメディアリテラシーを教えられてもわからない。子どものころから活用方法や怖さもしれたのではないかと思う。
- SNSも中身は人間なんだということを伝えておくべきと思う。
- リテラシーだけではなく、ネットやスマホでできることはたくさんあるので、機能の活用の仕方を教えてもらえるとよいと思う。
- 一生スマホとともに生きていく子どもたちは、スマホに縛られずにいかに生きていくかということをお勉強した方がいい。色々なことを学ぶことに時間を使った方がいい。

3 検証結果

(今後の部会での議論をまとめ掲載します)

○ インタビュー質問の柱に関係する点を含め、今回調査で把握できた子ども・若者のコミュニケーションに関する意識について記載します。

○ 事務局で気づいた点

- ・ 調査の結果、若者のSNSの使用について、SNSを便利な道具として使用しており、情報リテラシーの面では、不特定多数への発信は個人情報発信しないように気づかうなど、一定程度理解が進んでいるようである。SNSは生活の一部になっていながらも、インタビューでは、利用者としてのコメントが多く、積極的に活用して創造的に使いこなしているということは少ない。
- ・ 信頼関係と成長という面では、SNSは信頼関係を醸成するツールとして考えている若者は少ない。実名ではないアカウントのやりとりの中で信頼を築くことはあるかもしれないが、現実の関係になったときに同じ関係でいられるのかについては疑問との意見もあった。
- ・ 曖昧なコミュニケーションでは、スタンプの使用は文字表現に感情をのせ、文字で伝達する内容を補完するために使用しているようである。相談などの場面では、LINE電話や対面で行いたいという意見が多く、文字では伝えにくいことは直接伝える方が容易であるとの認識のようである。グループLINEでの意見の食い違いについては、返信の義務の薄さから既読スルーすることが多いが、1対1のやり取りでは曖昧にすることはないという意見もあった。
- ・ 親子のコミュニケーションでは、親とのやりとりは事務連絡機能が1番で、気持ちをやり取りするという意見は少数であった。ただ、謝罪など言いにくいことではLINEを使うという意見もあった。
- ・ Twitterでは、実名ではないアカウントにより不特定多数又は公開範囲を限定した友人に対して愚痴などネガティブなことを発信している。一方的なつぶやきであることが多く、コミュニケーションとは言えないが、SNSが、青少年が日常的に抱えている弱さを吐き出す場になっているようである。
- ・ ひきこもりの経験がある若者の中には、LINEを使用しない又は使用しても親など親しい人との事務連絡という使い方をしている。LINEは会話のようにやり取りしながら進むため、コミュニケーションの苦手がSNS上にも表れているようである。
- ・ Facebookを活用している若者は、自分の興味・関心のある人や場と繋がりをもつためのツールとして利用している。そうした若者は、自分の成長のきっかけとしてSNSを使用しているとのコメントもある。実名のアカウントを基本とするSNSでは、若者自身の成長につながる人間関係や経験を築く一助となっているようである。

第6章 今後に向けて（提言）

（今後の部会での議論をまとめ、掲載します）

提言の方向性（事務局案）

- 創造的な未来を切り開く子ども・若者
 - ・ 若者の中には、SNSを通じて自分の興味・関心のある活動をしている大人とながりを持ち、成長していくきっかけを得ている例がある。
 - ・ 情報ネットワークを通じ、信頼や成長といった、自己形成につながるような体験を促進する情報メディア、社会、若者支援のあり方について御意見をいただきたい。

- 困難を有する子ども・若者への支援
 - ・ 生きづらさを経験した若者のSNSの使い方では、ツイッターやYouTubeなどで、自分が作成した絵や写真を投稿している。投稿に対する評価（「いいね」）は、あってもなくてもよく、もし「いいね」をされても、自分を評価されたのではなく、絵や写真が評価されたものとして受け止めている。また、投稿する内容について完璧な内容になるよう準備をしたうえで発信している例がある。
 - ・ 生きづらさを抱える子ども・若者が、SNS上で自分が作成したものを表現することで得ていることは自己肯定感の育みのきっかけとなりうるものなのか。困難を有する子ども・若者の社会参加につながるような情報メディアの活用、若者支援のあり方について御意見をいただきたい。

- 子ども・若者の成長を支える担い手の養成
 - ・ 情報ネットワーク社会において、情報メディアの扱いは子ども・若者のほうが長けている面があり、子ども・若者が大人に情報メディアの使い方を教えるということが考えられる。
 - ・ 子ども・若者と大人が相互に学び合うとともに、相互に理解し合うきっかけとして、情報メディアを活用することについて御意見をいただきたい。